

もくじ 門井掬水と長門町の人々 1P 鹿浜での子どもの生活⑩ 2P  
お出かけ下さい地元の古代 ② 3P まちの写真館 ②千柳館 4P

# 足立史談

第568号

2015年6月15日

足立区教育委員会  
足立史談編集局  
足立区立郷土博物館内  
〒120-0001  
東京都足立区大谷田5-20-1  
TEL 03-3620-9393  
FAX 03-5697-6562  
(27-308)

## 門井掬水と長門町の人々

―季節を彩った日本画家の作品紹介―

郷土博物館

床の間には書画が欠かせません。とくに季節にあつた絵画は華やかに座敷を飾ります。しかし最近では暮ら

しぶりの変化から書画を飾る家は少なくなり、床の間自体も無くなりつつあります。



楓下花菖蒲図【左】と蛭狩り図【右】 いずれも絹本着色

今年三月、所蔵者のご好意で、旧家の床の間を飾った絵画作品の現品確認することができましたのでご紹介いたします。

■日本画家・門井掬水（かどいきくすい） 明治十九（一八八六）年に茨城県鹿島郡で生まれた門井

掬水は、鐫木清方（一八七八～一九七二）に師事した日本画家です。清らかな美人画や風景画を描く人として知られ、代表作は五浦美術館、さしま郷土館（いずれも茨城県）などに收藏されています。掬水が両親とともに上京した近所に鐫木清方が住んでおり、十歳だった明治二九年から画業をはじめます（入門は三〇年）。清方自身によると掬水は最初の弟子でした。掬水は清方とともに活動を続け、清方の門人たちを結んだ郷土会の活動を担いつつ、多くの作品展に入賞して有名になりました。晩年まで活動を続け昭和五十一（一九七六）年に没しています。

■長門町の旧家たち  
かつて足立区長門町とよばれた地域の旧家の人々は、掬水と親交を結んでいました。掬水自身も、戦後に近所に

住むようになり（地所も長門町の旧家を借地）、長門町の人々は掬水を囲む会を催したといえます。そうした家々の一つに羽住家があります。同家に伝来している画幅の中に、掬水の絵、7点が含まれていました。

① 七福神図 絹本着色  
② 二見が浦の日の出 絹本着色  
③ 蛭狩り図 絹本着色  
④ 楓下花菖蒲図 絹本着色  
⑤ 寿老人図 絹本着色  
⑥ 紅葉流水図 絹本着色  
⑦ 桐花孔雀図 絹本着色

季節の床の間を彩る絵画たちです。正月を飾る二見が浦や七福神、秋の紅葉に加え、ちょうど今の季節に相應しい画幅が見えています。紹介している蛭狩り図（上・右）は、新暦六月に相應しく、清らかな印象の和服姿の女性が蛭をさそう空間の静かさが印象的です。

楓下花菖蒲図（上・左）は、上部に楓（一年を通して赤色が映えるチシオカエデ）、下部にはなしようぶを配しつつ、ちょうど飛び立つタマムシを配し、静かな空間の中に小さな羽音が聞こえてくる印象を与えます。本図もちょうど今の季節に合う作品でしょう。

ここに掲げた羽住家の画幅も、季節の床の間を飾りました。①や②は正月に合わせた画題として定番とい

えますし、秋の紅葉の画題も含まれています。掬水を囲む会では、参加している長門町の旧家から、こういった絵を描いて欲しいというリクエストもあつたそうです。

日本画を用いる旧家の暮らしと、画家の活動を支える慣習は、江戸時代や明治時代に盛んでした。主役は千住の商人や江戸の町衆が知られていますが、昭和時代の足立でも、こうした絵画と暮らしが密着していた文化がありました。これらの作品はかつての長門町での美的な暮らしがあつたことを今に伝えていきます。

※長門町・ながとちよう 昭和七(一九三二)年〜昭和四十一(一九六六)年の現足立区中川付近の旧町名。江戸時代から区制施行までは長右衛門新田といふ現在の足立区中川にあつた。

(学芸員 多田文夫)

縁故疎開ですぎた北鹿浜町の思い出 28

## 鹿浜での子どもの生活 10

小川 誠一郎

■田植えの傍らで 田植えは、新学期が始まって間もない時期に重なる。屋敷前の田んぼで母が助(す)けた際、足手まといになつた弟や妹の面倒を看ながら畦道から眺めていた。

早苗の束を積んだ畳一枚位の平底の田植え舟を曳いてきて田んぼへ滑り込ませ、一斉に田植えが始まつた。流れるような皆の手先の動きに見飽きると、あの舟に乗って好きに動き回れたらおもしろいな！関心はとうにあらぬ方へ飛んでいた。トキちゃん(鳥堀)に浮かべたことがあつた。子供一人が良いところ、水面を滑るようでバランスを取るのが難しく、転覆しそうだった。

■イナゴ捕り 子供達は田んぼの畦を巡りながらイナゴ取りに励んだ。

数を競うわけでもなく、長い後足が淡い朱色の、お医者さんと呼ばれる変り種を何匹捕まえたかの競争になつた。当時の農葉がほとんど撒かれたことのない畑や田んぼは、益虫、害虫の別なく、昆虫が安住できる楽園だった。稲の茎につかまって上つて来るイナゴだけを、片手でサツと払うように掴む。稲とイナゴを傷めず握り取るのが難しい。イナゴは怒ると口から黒褐色の液を出し手指が汚れた。紙袋一杯になつたイナゴはとどのつまり鶏の餌になつた。畦から届くところであの数だから、田んぼは莫大な数のイナゴを養っていたはずだ。アセチレン大砲(※)で脅かせば、スズメの群れは一時的に追い払えるが、イナゴは音など分らない。

### ■誘蛾灯

終戦後しばらくして、見

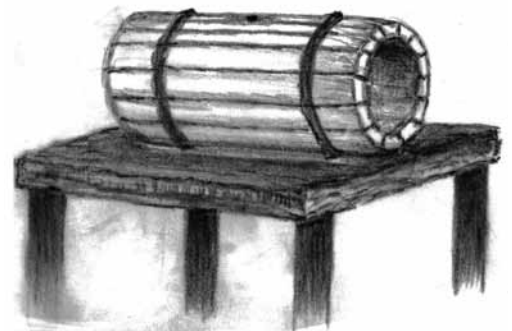


図 アセチレン大砲

渡す限りの夜の田んぼに、やっと二三見つけ出せる数の誘蛾灯が設置された。しっかりとした木組のやぐらの上に、水面に石油類を揚げた一メートル四方で深さ一〇センチメートルほどのブリキ製バットが置かれ、その上に垂直に青色水銀灯が立っている。暗闇に輝く美しい光は子供心も魅惑した。昼間、覗きに行くと、バットにどろどろになつて折り重なっているのは、大小とりどりの蛾ばかり、カブトムシなどの大型甲虫が見当たらないのでなぜかホツとした。

■セミ捕り 鹿浜にはセミが四種類いて、季節になるとニイニイゼミ、アブラゼミ、ミンミンゼミ、そしてツクツホウシの順に現れ、鳴き始める。針金を丸めて径一〇センチメートル程の輪を作り、竹竿の先端へ結



図 水田の中に灯る誘蛾灯

び付ける。これに新鮮なクモの巣を何層もからげると、しゃもじ状のセミ取り棒になる。小さなニイニイゼミはこれに背中を張り付けて捕れた。アブラゼミは手の届くところにいるが、大きくて力が強いので、たいていはおしっこを掛けて逃げて行く。

ミンミンゼミは羽が透明で透き通り、高いところに止まっていて見つけ難い。ある時、袋を持ってセミ取りに行くと言ったら、お盆前の殺生はやめた方が良く、と祖母に思いがけない小言をもらった。ニイニ

イゼミの背中には、アサリ貝のような個々に違う文様があって楽しい。セミは短い命と聞いたので、取っても逃すことが多かった。一方、セミ取りのためとはいえず、出来上がったばかりの夕空に美しい、クモの巣をいくつもめちやめちやにしてクモの子まで散らした所業、悪いことをしたなあと思う。

■川辺の様子 シジミの川は荒川堤にぶつかると右に大きく折れて少し行き、堤下の立派なコンクリート・レンガ造の水門を経て芝川へ合流する。高橋茶屋の娘さんが深そうなどころで泳いでいるのを見かけたことがある。兩岸は良質な黒褐色土壌で、四・五メートルの高さの左斜面の中心ほどに、やっと歩けるほどの踏み固めた道ができていた。人の近づけぬ岸辺には、ガマの穂が見え隠れする、背の高いヨシなどの水草が繁茂して自然の自由な営みも感じられた。芝川がもう目の前の左岸は、ゴミの台地の縁が低くなって次第に畑と接する辺りだ。釣り人のビクに天然のウナギを見たことがある。

■サワガニ捕り 子供達の興味はもっぱら赤い大きなハサミの、元氣な沢ガニだ。足を滑らさぬよう辿りつつ、土壁の方々に掘られた巣穴を覗いてカニを探した。外にいるのがスルツと走って巣穴に逃げ込む。穴の斜め横から棒を素早く差し込み、

途中を通せんぼうしてカニを追い出す。捕まえる時がむずかしい。とっさの勝負、足の付け根を二本の指で押さえ、持ち上げるのだ。迷いが出ると、固いハサミで指を挟まれ痛くて投げ出すことになる。取って来ては庭の木陰に穴を掘り、素焼きの小さな植木鉢を組んで棲みかを作っていたが、学校へ行っている間に逃げられてしまう。庭にカニがいたよ！と八重ちゃんに告げられる。井戸端下に水辺があったが、川から遠く離れたこの地に安住できたろうか。

※両端が開いた径二〇センチメートル、長さ五、六〇センチメートル程度の、針金のタガを巻いて補強した竹筒の中央部に、径一センチメートルの穴がうがたれている。実際の操作は、穴が上に来るように、この筒を水平に横たえ、穴の直下にカーバイドを一つまみ置き、穴から水を適下する。カーバイドと水との反応で発生したアセチレンが、筒の中で空気（酸素）と混ざって爆鳴気（爆発性の混合気体）ができる。頃合いを見てマッチを擦って穴から落とすと、引火爆発して大きな音を発する。

（慶應義塾大学名誉教授）

▼「手記 爆弾が落ちた日」と「ここで見て足立の博物館資料」は次号掲載です。

おどかけ下り 地元の古代 2 足立区役所文化財係



写真1 (右) は、いったい何処だかわかりませんが、何やら古めかしい舟に乗った男性たちが、一生懸命に櫂をこいで川を進んでいます。よく見ると男性たちの髪型は、長髪を左右の耳のところで結っています。どうも現在人ではないようです。舟の船先と艫には荷物がたくさん積まれています。大きな壺のようなものも見えますね。

さてこの舟は、はるばる何処からきなのでしょう。これまでの研究で、古墳時代の伊興には遠く近畿や東海地方から物資が舟を使って太平を伝えて運ばれていたらしいのです。

でも伊興が終着点ではありませんでした。ここで川を行くの適した舟に荷物とともども乗り換え、埼玉古墳群あたりを目指しました。

伊興遺跡公園から道路を反対側にわたった伊興氷川神社、さらに一〇〇mほど北にいったところに流れる毛長川がこのジオラマのモデルの場所です。

古代伊興が遠い世界と水域でつながっていたようすを体感できるジオラマを是非一度ご見学下さい。

いったいここは何処でしょうか？ —伊興遺跡公園展示館ジオラマの風景—

実はこの舟の乗員たち、伊興遺跡公園展示館にあるジオラマのなかにいます。もっと引いて写した写真2 (下) をご覧下さい。舞台は古墳時代の毛長川です。目をこらすと、川べりに建物や数棟建っていて、人々がにぎやかに作業しているのが見えますか。少々細かいですが…。

【お問合せ】  
文化財係  
電話 03-3880-5984



まちの写真館 2 千柳館

### 千柳館のあゆみと千住の思い出 2

柳下 静子

■仲町通りの思い出 鷗外が住んでいた頃の旧日光街道の町並みは、表一列だけでその裏はすぐ田んぼや畠であったようだが、私の記憶する昭和十年代の仲町通りは、東西両側にぎっしり商家が立ち並び、本格的な西洋館吹き抜け天井の立派な銀行もあり、東側西側には数軒おきに小路が奥に通じ、そこを覗けばちよつとした塀を巡らした貸家風の一軒家、玄関を開けると奥まで見通せる長屋も続き、もう田んぼなどはない。

大通りは時に子供の遊び場でもあった。近所の子と、ろう石で地面に字やら絵やら描いて遊び呆けていてもそこに自動車が通っていく記憶はない。「ヤツチャ場」に通う馬を引く荷車が通った後の落し物(馬糞)にホカホカ湯気が立っている景色の方が残っているのがおかしい。

いま、墓参りの帰り路、仲町通りを歩いても昭和一二年生まれの私、昭和二〇年三月、あの戦争の末期、強制疎開で立ち除きを余儀なくされるまでそこで育ち暮らした「千柳館」の跡地を捜し出すのはもはや難しい。それでも例の「旧日光道中千住宿家並変遷図」(以下「家並変遷

遷図」)の明治、大正までは堂々と「千柳館」は表示されている。残念ながら戦争で焼失し、昭和三〇年まで千住から遠ざかってしまったせいも人々の記憶から消えてしまったのか昭和一〇年代以降は空白になっている。

■近隣の商店 その「家並変遷図」によれば、仲町通りの半ばよりやや旧区役所通り寄りの東側、一間半ほどの小路、両脇は「加藤楽器店」と「天狗衣料店」、そのすぐ奥に「千柳館」とあり、私の記憶と一致する。当時子供たちは「楽器屋」とは知らず「トーブツやさん」と呼んでいた。唐物は外国、まだ珍しかった運動具や楽器などの舶来品の店だったのだろう。「天狗衣料店」のことは「タビヤさん」と呼んでいた。昔から旅人の往来のあった千住には足袋を商う店が多かったときいた。そのタビヤさんの裏の塀と我家の居間の西側の端が隣接していた。

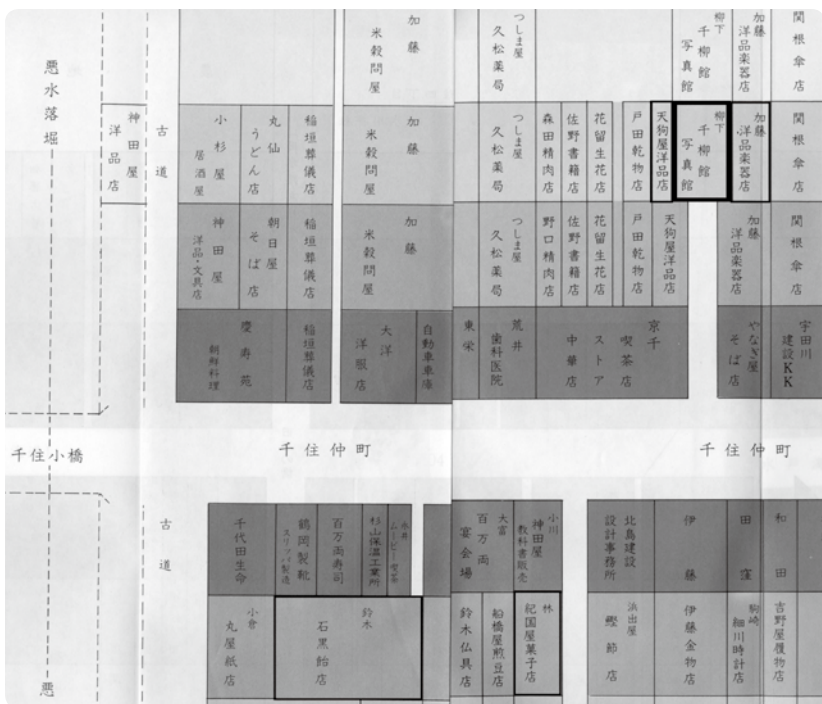
昭和一八年か一九年頃、益々戦況が悪化して衣類の統制が始まり衣料切符が各家に配られる時代になった。そんなある時、タビヤさんの塀を越して大きな風呂敷包みが二ツ、三ツドサツと投げ込まれた。後になつて母から聞いた話したが、大きな衣料店には、統制前に調査が入るので隠匿衣類を預かって欲しいとのこと。大きな重たげな風呂敷包みが投げ込まれたドサツという音がいま

も耳に残っている。母は「イントク」に協力して御礼にタビの一足でももらったのだからか。もう確かめようもない。

通りの向い側には、「家並変遷図」にも載っている館の「石黒」があり、「紀ノ国屋」は間口が広々とした大きなお菓子やさんだったが、ガラスケースがみるみる空っぽになっていった頃、ほんの少しの間だったと思うが、子供のいる家だけ、月一度お菓子の配給があった。当日、母の分けてくれる手許をじつと見つめ、めいめい豊かだった頃のきれいな空箱に分けて一月間大事にもたせようとするのだが、すくなくなくなる子といつまでももたせる子と姉妹の性質が表れたという。

■戦争の足音 その「紀ノ国屋」のすぐ裏に、不発弾が落ちた昼下がりに、父のバタバタと物干し台から駆け下りてくる足音、居間の畳の下に掘られた防空壕に滑り落ちたときの火鉢で煮ていた砂糖なしの煮豆の匂いがいまも甦ってくる。いよいよ昭和二〇年三月、強制疎開の命令が下される日も間近い頃だったと思う。

(国立市在住)



『旧日光千住宿家並変遷図』(部分)  
大正十年(震災前)の家並に「千柳館」、その隣の「天狗衣料店」・「加藤楽器店」、通りのはす向かいの昭和十年(戦前)の家並みに「石黒」・「紀ノ国屋」がある。実際には「千柳館」は昭和十年代は存在していた。